



188826



日文 701724925

村
山
リ
ウ

源
氏
物
語

書

中
卷

創 元 社

源氏物語

(中 卷)

昭和卅五年十一月三十日初版
昭和卅九年二月二十六日六版

定價四〇〇円

著者 村山リウ 発行者 大阪市北区
区樋上町四十五番地 矢部良策印
刷者 大阪市浪速区元町五丁目
五六三 伊藤佐久馬 発行所 大阪
市北区樋上町四五番地 創元社

目 次

[illegible]

目次

源
氏
物
語

中
卷

玉 たま髪 かみ

六条に新築された大邸宅を六条院と言い源氏の本邸とし、二条院は別荘になりました。春夏秋冬それぞれの趣を呈したすばらしく贅沢な六条の邸宅に、それぞれ女君たちが引き移りました。

源氏の君の侍女右近は、こうしたありさまを見るにつけ、昔のことがしきりに思い出されてなりません。この女はかつて夕顔とともに河原院へ誘われた女房です。夕顔の死後、源氏の君の侍女として二条院へ奉公し、今度も六条院へ供して来たのでした。

源氏の君は何かの機会には夕顔のことを思い出し、右近と語りながら、いまだになつかしがつておられるのです。したがって、もし夕顔が今も生きていれば、必ず六条院への引越しに加えられるたであろうと思う右近は、今さらのように夕顔の早死が惜しまれてならないのです。きっと明石の上ぐらいの扱いは受けていたであろうと、思ひは十七年の昔へさかのぼって行きます。

さて十七年昔へ暦をかえしましょう。

夕顔の花がほのかに匂う五条の家では、侍女一人をつれて、美しい貴公子に誘い出されたまま消息を絶った女君を案じて、八方捜し求めましたが一向に手がかりがありません。

まじない師などは、この方はもう生きてはいませんよ、など言いますが、かわいらしい姫君を残して、まさかこのままでは、と思い、いつか帰つて来るものと待ちあぐねていたのでした。はや半年たちますが、やはり消息不明です。

年が明けて姫君は四つになりました。その年乳母の連れ合いが太宰の少貳になって九州へ転任しなければならなくなりました。姫君のことを思うと、母君がいつ帰つてみえるか知れないので、このままここにとどまつてと思うのですが、九州と京都に世帯を置くほどの余裕はありません。姫君を父君頭中将の本邸へお渡ししようか、と考えてみましたが、頭中将から母君はと尋ねられたら返事のしようがない。それにまだ四つでは本邸へお預けするのもかわいそうだ。どうしたら姫の仕合わせになるだろうと思案した末、少貳の任期は五年だから、五年の任果てて帰京したとき父君に事情を申し上げてもよからう、小さい間はお育てしようと、一緒に九州へ行くことになりました。

船は明石の港を出ました。播磨灘にかかるともう生駒、信貴の連山も霞のかたに消え、はるばると来たものだという思いがします。姫君は何もかも珍しく、

「母さんのところへ行くの」と明るく、かわいらしく聞かれると、乳母も娘たちも涙が出て仕方がありません。しかし船路に涙は禁物と我慢をしながら、それでも太宰府へ無事に着きました。

さて、五年は夢のように過ぎて任期は終わりました。京都へ帰ろうと思うのですが、男の子が三人と娘二人の家族で、長男と長女は既にこの土地の人と結婚して子供まで生まれております。これだけの大家族となると、旅もなかなか費用がかさみます。そんなことの算段をしているうちに、日はどんどんたつてゆきます。その上、あいにくなことに少貳が病氣になってしまったので、いつ京

都へ帰れるやら、めどがつきません。臨終の枕もとへ三人の息子を呼んで、

「私に孝行をしようなど思わなくてもいいから、お姫様を何とかして京都へお連れし、一日も早く父君に引き合わせ、お仕合わせな仲間入りをさせてあげることだけを心がけておくれ」と頼むのでした。やがて少貳は亡くなったのでした。

この少貳はなかなか骨のある地方官だったとみえて、反対派が彼の死後圧力を加えましたので、この家族は京都へ帰る算段がおさらむつかしくなるのでした。十を過ぎ美しく成長する姫を見ては、いらいらするばかりで、帰京の願いはだんだんと遠のいて行くような様子です。

夕顔の美貌の上に父系藤原氏のみがかれた品格を受け継いでおりますから、この姫の上品さ、大^お様さ、そのうえ性格は明るく、頭もいいのです。一年一年目を見張らせるように美しく成人するの^よで、こんな草深い田舎に置くことは心苦しいのです。ところがあまり美しいので評判になり、

「少貳の孫はとても美人だそうだ」と、あちらこちらからさかんに求婚があるのです。求婚者たちは大体土地の豪族です。乳母や娘は、こんな田舎者などにと思ふものですから、

「うちの孫は美人は美人だけど、結婚できないようなかたわです」と言って、結婚問題は一切受け付けないのです。するとまた世間は、

「かわいそうに、あの孫は高貴の人の筋だそうだけど、かたわでは」という評判を立てました。乳母たちは求婚防ぎに言ったものの、また腹が立つやらで……。

こうしてとうとう姫君は二十になってしまいました。気持だけはいらいらしていますが、年ともになだんだん眷族がふえて、連れ合いが、子供がと、これではなかなか九州の土地を離れられない

ことになるばかりです。そこへまた一人新しい求婚者が出てきました。

隣国の肥後に、大夫の監けんと言って大地主で大ボスがいるのです。それが求婚者です。監は九州の実力者で、このごろしきりに都の人のまねをしております。都では上層階級になるほど身辺に沢山いい女を侍らせているそう、自分ほどのもの、なんの都の貴人に負けるものかと、美人を大勢集めているのです。これがこの男の趣味らしいのです。少貳の孫娘の評判を聞いては放っておけません。ぜひ妻にほしいと申し込みました。

乳母は相変わらず、本人はかたわです。結婚はしないと申しますので、いっそ尼にしようと思っております、と断わったのです。ところが監は、尼になられたら大変、これは急がなければというので、兵を引き連れて山越えて太宰府までやって来たのです。まず少貳の息子たち三人を呼び、よい条件を持ち出して歛心れんしんを買い、この縁談を運んでくれと頼むのです。

次男と三男は条件につられて心が動きました。しかし長男の豊後介ぶんごのすけは、何と言われても父の遺言を守る決心で、ボスの買収に乗りません。監は都の人のまねをして、舶来ぱく来のシナ紙の薄様にいい香料をたきしめて、恋文を届けてきました。

当時は大陸交通が封鎖されていましたが舶来品は珍重されました。田舎者でも九州は舶載品が手にはいる機会が多く、監は一世一代のつもりで張り切ったラブレターを送ったでしょう。字は下手ではありませんが、歌の文句はいかにも田舎びて、ほんとに下司な感じですよ。返事のしようもないまま捨てておきましたら、ついに次男に導かれてやって来ました。

年は三十ばかり、がっちりとして背が高く顔色は浅黒く、ほんとに恐ろしそうな男です。一生懸

命しゃべっているのですが、まるでさえずっているようで、何を言っているのかいっこうわかりません。とにかく乳母は何とか断わろうと思つて、二月は縁組みの月ではありませんので、と申します。監は、

「私を信用なさらないので縁談に積極的になつてくれないでしょう。私は幾人もの女を置いています、そんな女とお宅のお嬢さんとを同列になど思つていません。あんなものは物の数ではありません。真の妻として大切にいたします。かたわでも盲目でも、いざりでもよろしい。血筋のいいお嬢さんがほしいのです。もしいただけたらお后のように大切に、下にも置きません」と、なるほど真実らしくは見えますが、乳母はとんでもないと、この縁談に動くはずはありません。

そんな話のやり取りを聞いている玉鬘は、ただ悲しくて奥の方へ引つ込んでしまつて出てきません。監は、それではいったん国へ帰つて四月二十日ごろ迎えにきますと、ひとり決めてしまつたのです。万事休す。

姫君は乳母の一家が大切にしてくれることに感謝をしておりますものの、自分の運命のはかなさを考えると、神様や仏様におすがりして、年に三回は長い精進をして、ひたすら神仏の加護を願うのでした。

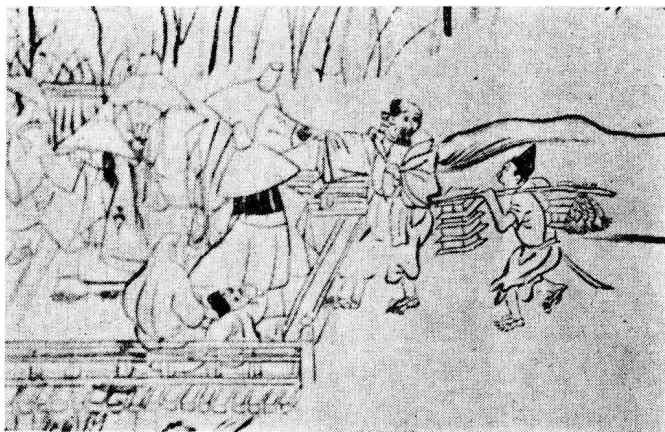
四月二十日と監が日切りをした日は、だんだん近づいてきます。次男はすっかり買収されているので、あとのものが頭を痛めた果てに、乳母はどうあつても姫君を連れて京都へ行くといい、長男もそれに同意、妻と子供を九州に残して出発しようと、大へんな決心をしたのです。もちろん妻子には極秘で。

さて、姉と妹は二人とも京へ行きたい。しかし姉には相当眷族が出来ているので、なかなかむづかしい。妹娘はまだ子供もないから、夫との縁を切つて姫君と一緒に京都へ行こうと言います。それでこつそり九州を抜け出すことにしました。

しかし自分たちが抜け出すことが大夫の監に知れたらそれこそ大変だ。監ににらまれたら九州ではとても暮らせるものではないので、夜逃げ同様、早船を仕立て、不眠不休でどここの港へも泊まらず、漕ぎに漕いで行こう、と相談しました。

それでももし監が知つて、船足の早い大きな船で追いかけて来られては大変だ。一刻も早くと屈強な男二人、女中二、三人だけ連れて小舟に乗り込み、夜陰にまぎれて漕ぎ上りました。響の灘では漁師たちが、あれは海賊の船だろうか、飛ぶように漕いで行つたよと評判するくらい必死に漕がせたのでした。ようやく淀川の河口までやって来て、ここまで来ればもう大丈夫と、ほっとしました。ほっとすると同時に、今までの緊張が急にほぐれ、思い出すのは故郷へ残してきた妻や子供の事です。もし自分たちが去つたあと監から大変な目にあつてゐるのではないだろうか。かわいそうなことをした。無我夢中で飛び出してはきたものの、あとの処置をしていなかったことが悔まれるのでした。妹も飽きも飽かれもせぬ夫なのに、黙つて飛び出してきて、さぞかし夫はなんて不誠実な女だと自分を恨んでゐるであらうと、たまらない思いがします。

これから行く京都に家や屋敷、あるいはたよりにするだれかがあるというのならそれで勢いもつくが、別れてもう十七年です。これはというたよりのあるわけではなし、親類のしつかりしたのがあるでもなし、ここまで来は来たものの急に不安を感じるので。さまざま思いのうちに、そ



人 商 行

れでも無事に京都に着きました。

昔の知り合いをあちらこちら捜し回りますが、十七年の年月は人々との大へんな隔たりを作っていますので苦勞なことです。九州ではすっかりもの豊後介も、まるで水鳥が丘へ上がってじたばたするようなもので、苦勞のかいの芽がふいてきません。持ってきた路銀もあとわずかです。ついで来た男衆も見限ったのか帰ってしまいました。やっとこさ知り合いを見つけて落ちついた先は九条です。九条といえば場末、陋^{ろう}がわしい庶民の町で、行商人の住んでいるところです。

そんなところへ内大臣の姫君をもつたいない。早く内大臣に引き合わしたいといっても、そう事は簡単には運びません。今でも相当の人物の紹介状を持っていかないと大臣などにいきなりは会えないらしいのですから、ましてあの時代のことです。時めく内大臣家の御門前へさえ近づくわけにまいません。だれかりつばな紹介者がほしくて

も、その紹介者を得るのがまた大へんなことなのですから、あせりながら日のたつてゆくを見送るより仕方がないのです。こうなったら神様や仏様におすがりするより仕方がない。石清水の八幡様は御利益があると聞かされ、参詣して祈願をこめるのです。

さて次は靈顯あらたかな長谷（初瀬）の観世音へお参りすることになったのですが、なにしろ長谷までは宇治を過ぎ奈良山を越えて、山のべの道を南へ下り三輪山のふもとを回って、初瀬ですから、なかなかの長旅です。

みんなは馬に乗って行きますが、姫の一行は馬に乗るだけの路銀は持ち合わせません。歩いて行かねばなりません。いくら田舎住まいをしたといつても、歩いたことのない姫ですから、みんなと一緒に徒歩旅行、毎日々々一生懸命歩きますが、ほんとに足が痛くて、この旅路はなかなか大変です。道すがら

如何なる罪深き身にて、斯かる世にさすらふらむ。我が親世に亡くなり給へりとも、我を哀れと思さば、おはすらむ所に誘ひ給へ。もし世におはせば、御顔見せ給へと、仏を念じつゝ、ありけむ様をだに覚えねば、唯親おはせましかばとばかりの悲しさを、歎き渡り給へるに、斯く差当りて、身の理なきまゝに、取返しにみじく覚えつゝ、辛うじて、椿市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせで往き著き給へり。

私は前世でどんな悪いことをしたからといって九州まで流浪したり、京都で当てもなくさまよわなければならぬのであろう。お母さん、私をかわいそうだと思つて下さるのならば、いつそあの世へ誘つて下さい。もしまだこの世に生きていらっしゃるのだしたら、お顔だけでも見せて下さい

ませ、と念じながら、苦しさを我慢して歩いているのです。

さて姫は「ありけむ様をだに覚えねば」三つで別れた母の面影を覚えているはずはありません。ただ母親さえ生きていてくれたらと、それが悲しいのです。

どうやら四日間の徒歩あるきで、朝十時ごろ椿市までやっとたどり着きました。「生ける心地もせで」と書いてあります。まったく半死半生の思いだったのです。足の裏が脹れてもう一步も動けません。

休ませてもらおうと旅籠^{はたね}らしい主人に頼んでみますが、馬にも乗っていないみすばらしい旅人ですから、宿守りは先約がありますからと、断わろうとしますのです。しかしここで断わられたら、もう動ける姫ではありませんので、無理に休ませてもらいますが、主人は機嫌の悪いことです。と、向こうから女二人を大切に四、五人の供を連れ、下司、童など相当数引き連れて、馬四、五頭に物など積ませて、こちらへやって来る旅人があります。宿守りは頭をぺこぺこ下げて、どうぞお泊まり下さい、と一生懸命に誘い入れるのです。

その一行と相客になったので、姫たちは邪魔にならないように、片すみに幕を引いて、その中にひっそりとしております。あとからの旅人もなかなか教養があるとみえて、これもひっそりとつましやかです。

そのころの旅は食事すらまかなわなければならないので、食事の用意をととのえた豊後介が、姫へお膳運びます。幕の外から

「三条さん、旅のことで何も間には合いませんが、これをお上^{かみ}へお進め下さい」と言って取り次ぎ

を頼んでいます。

それを聞いた相客の女は、だれだろう、向こうの客は……。お上^{かみ}などと言っているところをみると、大切にしている女主人公であろうと、そつとのぞきますと、真っ黒に日やけた顔に、どこか見覚えがあります。実はこの女は右近なのです。

右近は、はてと思いますが、どうも思い出せない。十七年もの昔ですもの、豊後介はまだ若かつたし思い出せないのも当然です。と、ひよいと幕の間から顔を出してお膳を受け取ろうとしている三条と呼ばれた女の顔、それも見たことがある。色は真っ黒になっているし、ずいぶんふけてこんでいるけれども、夕顔の君のところと一緒に勤めた朋輩の一人、三条ではないかと思いつきました。それで右近は使いを出して、三条さんにお目にかかりたいと言わせます。

三条はいま姫君のお食事がすんで、そのおさがりをいただいているところです。食べものに氣を取られて夢中でしたが、ようやく出てまいり、

「こんなところで田舎者の私を知っている方などあるはずがないが」とひとり言を言いながらやって来ました。さてお互いに顔を合わすや、

「まあ右近さんじゃありませんか」

「あなたは三条さん」

「その後夕顔の君は……」

と話はそれへ集中されます。右近は夕顔が亡くなったことを話しながら、お互いに泣くやら、久しぶりの巡り合いを喜ぶやら。それから隔ての幕も取り払い、一緒になってその後の話が始まるの